

# 婦人戰線

復刻版

全一六冊

■高群逸枝主宰■



無產婦人藝術聯盟

綠蔭書房

# 刊行にあたって

恐慌の嵐が世界を覆っていた昭和五年一月、婦人解放の旗手高群逸枝を中心に、『青鞥』の平塚らいてうをはじめ城夏子、住井すゑ、望月百合子らの人々によって無産婦人芸術聯盟が結成され、三月に機関誌『婦人戦線』が発刊された。雑誌は昭和六年六月まで計一六号が刊行された。

『青鞥』ははじめて婦人自身による婦人の個人的自覚をめざした。そして平塚らいてうが第二青鞥とよんだ「婦人戦線」は最初の婦人の「社会的自覚」にもとづく運動であった。

月経、妊娠、出産、育児など「婦人の特殊的事実」に対する「無価値視」を強権社会の悪とし、男性専制の社会を批判するなど一貫して婦人の視座から近代日本社会の暗部で苦吟する婦人の実態に光をあてた。本誌の主張・分析は時代をこえ今日の婦人問題の核心を衝く鋭さと新鮮さを失わない。久しく待ち望まれていた雑誌『婦人戦線』の完全復刻は、近代日本の女性史研究に大きな意義をもつばかりでなく、婦人問題に関心をもたれる方々にも大いに啓発される内容をもっており一読されることをおすすめする次第です。最後に本復刻が橋本静子氏をはじめとして高群逸枝を敬愛する同人の方々などのご協力により刊行することができましたことを記しておきます。



後列右より住井すゑ、館野せつ、大道寺房、延島治  
前列右、城夏子の婦人戦線の人々

# 婦人戦線に立つ

高群逸枝

わが國における、婦人自覺史は、かの「青鞨」運動に、最初の頁を起した。それは、誰も知るやうに、婦人の「個人的自覺」によつたもので、その後、いく足霜かを経て、いま茲に、我々によつて、婦人の「社会的自覺」にもとづく、劃時代的の運動が、起されようとするのだ。

すなはち、我々の此の運動は、婦人自覺史の、第二の頁をそむべきものであり、このことに對する、強き自覺と、大なる抱負とは、我々をして、暫し無限の感なき能はざらしめる。前途は遠い。果して我々によつて、いくばくのことか、成しとげられようか。それは知らない。たゞ我々は、彈丸の前進を、あるひはまた崖源たる凍土を、「行く」といふことを、も

はや唯一の「意志」としてゐる。

労働者が眞に労働者として自覺し、農民が農民として自覺した時、彼等は、すべての強權と彼等との對立を發見するのだ。茲において、彼等は「自治」をもとめだす。すなはち有史以後の強權社會を排し、それ以前にあつて人類が経験した處の自治社會を再び新しい形において求める強い欲求がこゝ

一、われらは強權主義を排し、自治社會の實現を期す。

二、われらは男性專制の日常的事実の曝露清算を以て、一般婦人を社会的自覺にまで機縁するための現実的戰術とする。

三、われらは新文化建設および新社會展開のために、女性の立場より新思想新問題を提出する義務を感ずる。

強權主義否定！

男性清算！

女性新生！

無産婦人芸術聯盟

から芽生へる。此の「自治」への目ざめは、實に近世に至つて人類がもち得た最も大なるものである。長い間の強權社會及びそれがもつ必然のピラミッド的政治組織は、商經濟、分業、私有財産等の基礎の上に、必然に打建てられたものである。今やそれらのものが、消費者運動の發展、生産者運動の進歩、機械の進化による農工合體（分業主義漸滅）の機運の成熟等のために、漸く崩壊し始め、その崩壊の中よりして、新たな社會組織への萌芽が、意識の上に、あるひは形態の上に、芽生え始めてゐることは、もとより必然の現象であるといはねばならない。すなはち、崩壊しつゝあるものは在來の強權組織であり、生起しつゝあるものは來るべき自治組織である。崩壊しつゝある強權組織が、強權意識を伴うものであり、生起しつゝある自治組織が、自治意識を伴うものであることは云ふまでもない。

かくて社会的自覺  
時のみ、眞のもの  
婦人が強權を排し  
たこと、すなはち眞の



若い頃の 高群逸枝

創刊号より(縮小見本)

# 『婦人戦線』

## 複製に寄せて

早稲田大学教授 紅野 敏郎

近代日本の文学や思想の歴史の上で、婦人に関する雑誌を順を追って眺めていく必要がどうしても生じてくる。その際に「女学雑誌」や「青鞥」の類ならば、容易に見ることが出来る。しかしこのたび複製された「婦人戦線」ということになる、その実物を手もとに持っている人も稀、各種の図書館においてもそろえているところは稀、つまり見たいと思ってもなかなか見られなかった雑誌の一つであった。高群逸枝が編集の中心、それに望月百合子や八木秋子や伊福部敬子や城夏子、それに住井すゑなどが常連。従って長谷川時雨の「女人芸術」からの脱皮をはかるかたちで作られた雑誌、というふうには私などには見える。創刊号に寄せた高群逸枝の「婦人戦線に立つ」という論文一つ読んでみても、婦人の自覚史の第二頁、という意識が明白にうかがえる。「無産婦人芸術聯盟」の機関誌として実に有効な役割を果たしたと思う。先日も甲府で望月百合子さんにお目にかかったが、ピンと張りつめたその姿勢には、この「婦人戦線」以来の一貫した資質がしかと感じられた。「戦闘小説」の号には、高群逸枝が「女闘士殺さる」(戯曲)、住井すゑが「桎梏」、望月百合子が「奪ふ」、城夏子が「冒険」という小説などを書いているが、それらを文学史に位置づけるとどのようになるか、それは私たちの問題ともなつてく

る。

女性史研究と文学史研究の接点の意義、それがこの「婦人戦線」を繰っていると、どうしてもやってみてみたい気を私たちに起させる。実はそういうエネルギーが誌面のすみずみにたちのぼっているのである。著作権者との間に十分な連絡、了解もとりつけた上でのこのたびの複製、その労に感激しつつ、新しく提起された課題に取り組んでいきたい。

## 『婦人戦線』の 複製を待つ

詩人・女性史研究者 高良留美子

高群逸枝は三十七歳のとき、森の家を建てて本格的な研究生活にはいたったが、その直前にアナーキズム系の雑誌「婦人戦線」主宰者となつて、編集と研究会に一年以上の実践活動を経験している。

アナーキズムの自治の思想は、高群逸枝にとってけつして借りものの思想ではなかった。その源を探れば、彼女が愛児の死産以来もちつづけていた母子保障社会の理想を、「強権社会」に対立する「自治社会」の理想に重ねあわせていたふしがある。アナーキズムの思想は、当時のアナとボルの対立といった政治的次元をこえて、高群の女性史の根本的モチーフと結びつく面をもっていたし、その結びつきは彼女の後半世の女性史研究をつらぬいて、共同体社会の理想のなかに生きていたということが出来るだろう。

また『婦人戦線』を通して実践運動に苦勞したことは、高群の女性史研究に、たんなる書齋仕事からは得られない実践的な視野をあたえている。ことに『女性の歴史』後半の婦人運動の章には、当時の婦人運動の分裂に苦勞した人にしてはじめて指摘できるようなすどい見解がのべられている。ある意味では『女性の歴史』全体が、分裂しつつ敗北へとのみこまれていった戦前の婦人運動の限界をのりこえるための、理論構築といった意味合いすらもつていたとわたしは思う。

このように重要なポイントにある『婦人戦線』は、これまでわたしたちにとってほとんど読めないような状態にあったのだが、今度その全巻が緑蔭書房から復刻されるといふ。高群の人生や仕事をよりよく知るためにも、当時の婦人運動や社会運動、思想の流れを知るためにも、またこの時代の雰囲気を知るといふ意味でも、まことに必要な時期に企画された、必要な刊行であると思う。



犬塚せつ

## 家族的だった 『婦人戦線』の人々

婦人戦線同人 城 夏子

昭和五年、「強権否定、男性清算、女性新生」といふ勇ましい旗ふりかざして出発した、女性アナキストたちの雑誌『婦人戦線』は、詩人高群逸枝を愛する十二、三人の、全くもう、ちんまりした家族的な集まりだった。高群さんは雑誌編集のこと以外にも、恋愛だの結婚だのの相談相手にまでなっていた。

ある日の編集会議の時、近所に住む松本正枝さんが、ご飯むしにおさつを一山ふかして現れた思ひ出もほほゑましい。

## 今も魅力ある雑誌

作家 瀬戸内寂聴

高群逸枝が『婦人戦線』を創刊したのは、一九三〇年（昭和五年）三月だった。逸枝三十六歳の時に当る。その一月、発刊に先だって「無産婦人芸術聯盟」が結成された。これは逸枝が音頭をとり、婦人解放運動の先駆者平塚らいてうも加わり、十四名の若い女性が参加した。聯盟のかかげた標語は、

強権主義否定！

男性清算！

というもので、なかなか勇ましい。まさしく、ウーマン・リブの雑誌である。らいてうの「青鞥」が我国ウーマン・リブの元祖として女の個我的自覚をめざましたものなら、逸枝の『婦人戦線』は、女の自覚を更に個から社会へと開かせたものであろう。

同人たちは毎月研究会を持ち、外に向つては『婦人戦線』を発行して、外部闘争の武器とした。したがって、その特集記事も「家庭否定」「ブル・マル男をうつ」「性の処理」「女流糾弾」「無政府恋愛」「都会否定」「無政府恋愛」「性の経済」「男性物色」ETC……といった活力と魅力にみちたもので、そのまま、現代の婦人雑誌の特集にかかげても、新鮮な感じのするものであった。

残念乍ら、この雑誌は、逸枝の恋愛による家庭の事情から、わずか一年半で十六号で終つてしまった。しかし日本近代女性史をふりかえる上では絶対に見落すことの出来ない貴重な資料である。住井すゑ、城夏子、望月百合子などの往年の同人の生存者をもつても、その個性的な魅力が察しられよう。

強権と男性専制の復活のきざしのみえる現在、ふたたびその復刻版にまみえることは、多にに愉しい。すべての若い女性並びに清算されたくない男性たちに読ませたい。

## 現代の婦人解放運動と 共鳴しあう『婦人戦線』

名古屋経済大学教授 水田 珠枝

七〇年代以来の女性解放運動が、わが国の女性の歴史にあたらしいページを加えたことを否定する人はいないであらう。性別役



延島 治

割分業の打破、「女らしさ」の再検討、家庭科共修、雇用平等法の制定等、女性解放のための諸要求がこれほど多く提出され、これほど多くの女性によって支持されたことはなかった。

しかしこの運動が、わが国の自生的なものというより、国際的な女性解放運動の刺激を強く受けたものであることも、否定できない事実である。欧米諸国では、現代の女性の運動を過去の運動の継続および克服として位置づける努力がなされているのにたいし、わが国では、過去の思想や運動との関連があまりにさげされてきた傾向がある。

近年、明治以来の女性問題に関する文献が復刻され、過去の女性の遺産を知るための資料が手近にあたえられるようになった。そのなかでもとくに、今回復刻される雑誌『婦人戦線』は、現代の運動と共鳴しあう部分をもつ文献である。そこでは、女性の解放が、生産と出産とのふたつの活動を担う人間の解放の問題とし

て示され、従来の女性論が批判され、女性を拘束してきた家族、女性の産む性の機能、恋愛という男性とのかかわりあい方などが論じられている。女性の目で女性の状態を直視しようという立場からとらえた現代の課題が、半世紀以上前の日本の状況のなかでとりあげられている。

この復刻版が、比較的手薄な昭和初期の女性論研究に使われるだけでなく、現代の女性解放の思想と運動をきたえあげるために、広く読まれることを期待したい。

## 真の燈台

婦人戦線同人 望月百合子

高村逸枝さんがあのボル全盛時代に同志と協力して婦人戦線を発行したことは、滔々と押し寄せ押し流れる権力指向時代への挑戦であり、民衆の友の如くにして実はその敵である流れの岸に一基の燈台を打ち建て真に民衆の友はその光であることを明らかにしたことであった。

それ迄漠然と人道的社会主義を称えていた人々もロシア革命の成功を知ると一斉にその暴力に依るボルシェビズムに顔を向け、それが一色の大河となって日本の思想界を押し流れ始めた。だが、暴力に依らぬ個人の自覚と自由意志による自治を根本におくアナキストは、その河の流れの危険性を見抜いていた。そこに構築される革命社会は民衆にとっては同じ権力社会でしかなく、只権力

者の首のすげ換えに過ぎない。

そこに婦人戦線が叫び、説き、闘う使命があった。体質こそひ弱な逸枝さんだったが透徹した精神と澄み切った心の眼で世を見透し自己の利害を省みず勇敢に戦線を敷いたのだった。逸枝さんが最も敬愛し母とまで慕った雷鳥すら生活を護らねばと自説を曲げて時流に乗ったことを思うと、逸枝さん始め婦人戦線を護り抜いた人々がいかに茨の道を歩ゆまねばならなかったか、まことに必死のことであった。

惜しいことに婦人戦線は十六号で終った。しかしこの昭和五年三月から翌六年六月までの十六冊の婦人戦線こそは逸枝さんの「日月の上」とも、彼女が生涯をかけたあの膨大な女性史とも匹敵するほどの重みを持つものである。それが今半世紀を経て若い世代に依って復刻される。これは日本近代思想史研究の上にも高群逸枝研究の上にも見のがすことのできぬ重要な資料である。この復刻を可能ならしめた関係者の高群逸枝への愛と研究心を爽とする。



望月百合子

## 婦人戦線復刻版

内容 昭和5年3月～6年6月

体裁 A5判／函入り／全16冊

定価 1セット・16,000円

推薦 紅野敏郎／高良留美子  
城夏子／住井すゑ／瀬戸内寂聴  
水田珠枝／望月百合子(敬称略・五十音順)

■総目次・索引は近刊の予定です。

## 婦人問題関係図書

### 女学雑誌総目録

早野喜久江解題・監修 明治19年創刊。  
日本で初めて女性問題を扱った雑誌。  
A 5判・定価5,800円(〒200)

### 家庭雑誌総目録

大木基子解題 明治36年に刊行された  
堺利彦編集『家庭雑誌』の総目録。  
A 5判・定価1,500円(〒200)

### 家庭雑誌

全5巻・付簡易生活  
復刻版・龍溪書舎刊

明治期の家庭生活の近代化を図ろうと  
した社会主義的雑誌。 定価55,000円

### 世界婦人

明40・1～42・7  
復刻版・龍溪書舎刊

宮川寅雄解説 自伝『妾の半生涯』で知  
られる福田英子が主宰した婦人新聞。  
A 4判・上製／定価9,500円

### 英文巖本嘉志子

復刻版  
龍溪書舎刊

幻の若松賤子(嘉志子)英文集の刊行。  
日本女子大学師岡愛子氏により日本語  
訳も公刊。巖本嘉志子研究者必携の書。  
四六判／英文2,800円・訳文2,200円

### 訳文巖本嘉志子

龍溪書舎刊

## 緑蔭書房

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-5

電話03-478-6270 振替東京4-56567

●小社は注文制です。最寄りの書店又は直接小社までご注文下さい。